荷祢

五 ろう 并一

哥と詞を名ごとわ

[V. 23]

PL788
.4
.G4
1654
vol.23
copy 1
Asian
Japan
Case

2004551302

年たちかへるあしたれそこのかしき名残なく
くもらぬうらくかげさまは数なるぬ垣ねの中ぞ
ゆきまれ草ワやうま女づきそめいけしかや
かしきぞろ霞に木のめも打かふり花のげかこ人の
くろものびこかまぞこゆかし。ましていとゞたま
を志けるおまへは庵よりちゞめこ所おほく。ぬがきさ
ましめへるれかたぐのありさ夜。まもびこそんも云
の葉ころまじくなん。其のおとゞのおまへとりか
て。梅の香もこ寸の内白ひにふさまぐひて。いける
仏のこくにとおぼゆ。さすがに打とけて。やすらかに
経なしめへり。さつこふ人ぞも。ワやうまもぐれ

ころを娘(ゆゑ)君のれうこまとしたしをめて、すこしおと
ちひこうかぎり、中くらしくしく、さうぞく
有さ海ありもじめて、めやすくもてつけて、実し
こまむきねつ、もぐこめれいもひして、もち升
かぐ三紙さへとりよきて、手手のかげりしるき、
としの内の税(いとひ)ごとだして、そぼれあへるに、(源)おとゞの
君さしのぞきあへれば、(おぐらが)おとゝろぐ引ちをしつゝ、
いともしこるきけざれとまびあへり、(源詞)いとしたるか
ちりこづくのいもひごとぐもなかこなをのくしふ
ことのみあらんし、すこしきをよや、(まれ)我ことぶき
えんとうちけしひあへるれありさ海をどしのたゞ

めれさへにこそまつ。けれそと却もひあがれる
中物の恵ぞ。かのてぞこゆるなどこそ。鏡の影にもうる
らひ給りつれ。けるくしの祈りはなるまがりのことをう
など罪也。あしこれほどは人ぐまいりこそて。拙さは
がしりけるを。夕けるれうるぐのさむざし給
らんとて。心ことにひきつくろひ。けさうじ給。抗
げこそげにこうかひあめれ。けさこの人ぐのこそ
かれかけしけるいとうしやましうこえけるを
うへにはれこをなしんとてこぶれこることぐを
そうしうちまぎつ。いそひこそて給
うれ氷とけぬる池のうぐこには世にもまれ

あまさかげそなしべる。げにめでたきれあそひだなり
紫 くもりなき池の鏡(うごミ)に万代をもしむべきかげぞ
しるくしけり。何(地)ぞまつけても。すゑと紙きれ
繋りをおしまれしく罪しかたしなふ。かふ(元日子日之)は子乃
日なりかり。げにおしきの妻をかけていたくむに。
ことわりなる日なり。姫(明石)ぎミの御方に(源ノ)つかるまへ
れハ。つらハしもげへなど。おまへの山の小松引
あそぶつきへぐの心ちども。垂(とき)どころなくしも。小の
おとぐより(明石上)。つぎとがましくしあれ見たるひげ。
どもつりごなどなれなへり。えなしぬ。ゑうの枝に。
り何れる事も。ぜふころあしんり

昭年月を松にひかれてゆく人にかふ鶯の初
音きかせよ。とゝをぬさとのと罵しめへるを。げに（源心）
衣とおぼしたり。こゝいとも云し給はぬかしきなり。
此（詞）れかへりは。こげ（姫宮にと云）かしきてゆへ。ちつゆおしこ給
べきなるにもあらずかしとて。れすぐるとうるまゝ
ちひかしをこそまつしをおふ。いと（地）うけ（姫宮ノ）くしげにて。
明暮こゝそまつる人ごゝにあらずこひ罵ゆられあり
さ雨を。いまで（姫宮と昭君ノ）おぼつるきさし月のへごくつけ
家もつこえがましく心ぐるしとおぼして
引（姫宮）別れ年はふれど鶯のまゝ立し松の初をも
とれめやおき（地）なきれ心にまかせて。ぐるくしくぞあめる

夜(添ん)のれ(花ちる之)まゐをこうまへぞ。とさなるぬけ
まや。いとしげかるこえて。ひぐとこれましき
こともなく。あてやかるすこなしぬへるけりひ
こえつる。(地)とし月をそへて。れ心の隔(つぎ)てもなく。衣
なるれなるしひなり。今はあれがちにちかやかなる
れ有様にもてなしきこえて。給はざりかつも。いとひつ
ましくありがたかんいもせの契ぞかりきこえて
かたしぬふ。こさ帳へぞてこれど。すこし(添ノ)をしやり
うきへば。まるさて(花ちる)おりす。ちるるはげに白ひ(衣裳を云之)ぬ
あらひまて。れぐしなどもいとくさりあるなり。
やさしきるにあらもど。えびかづらしてぞ。つゝ

ろひなかべき我(添ム)ならざらん人ハこゝざあしぬべき
れ(花ちり)ありさ夜をかくてうらこそうれしくほいあれ心
がろき人のつらにて、まれにそむきなひなましかば
など此(地)剣(さいめん)面のおりくには先(まづこゝ)我此心のながさも人の
此心のともにをもうれしくさふやうなりと思し
なり、こまやかなふりとしの此物語などなつかしく
きこえなて、おしのこゝ(むづら)いへ(添ノ)ひとりなふ、まぐ(ム)いこゝろも
すこなれ給ひぬほどよりハけたひおしくたゞ
たておしげなりひとりへのすぐこなまめかしく
人がげのあまるこたてれたつらひあるべきなりなれ世
こ夜やうなりれでうどハいとしもとくのへ給ひぬ

をさかなに抱きよげにすゑなしかへる。ちうじ（むと云へ）
こもおれおりしげとかとこえて。やまづきにもて
きやしかへるれかたちなどいと茶やうに。こくろ
くもれりとこゆり取なく。ふ夜なく匂ひきらくきく。
こ夜ほしさき夜ぞ志のへる。抱（むつ洗らしまてくる）ちひにしげこのへる。
程のしるぎにやかこのすそをこしほそりて。さぞら
かよかれりしもいと抱きよげに。こうかしこいと
けぎやかなりさ夜しうまへるをかくてこぎらまし
かぎとおもほしにつけてハ。えしもこをぐし給
まじくやかくいとへぞそなくこえて。まいりを給
へど。程せふまへ（むり）ぐるをおほくおやしきがうけく

の心ちも給なるがおほちしずまでなしはべるも。
いとおかし。さしばなりぬる心ちして。こなたも心
やすくはいうるひぬるを。いとまでなしはべて。
あるるもあまたまもいとりの人々し。いそけなききうる
琴なるあひともおめかしをまろともに聞なるし
女人ぶるろめく。おそいけき心もなく人なき所
あるとて聞しの人々ぶ。の給へんまでにとてもとこそて
ほうさとおりこともぞうし。薫ぐくまちる所におひしの
けれるまつりの女ぶちうきつてどのうちさしわ
ちうち。こ年のうちのとひ風。なりめしく吹るやを
りて地まりとまけるくあは。さるこれしじこれ

こゝす。いづとこまりしこまふに。すぐりのあるを
まぎりしく。さうしぜとりちしこうを。とりけ
こゝのふかうのさうぎやうきのごとくしき。さし
さしこうしとれに。おしげなるきんうちをさ。を
ざとめさよしあり出をけに。しぐうを(たきゆ ノ名く)くゆうりして。
抱ごとに志めこうに。えびかうのれまが魚ないと
えんなり。てなしひどものこぶれうちとけこうも。すぢ
えり。ゆへあるかさぎ面なりごとくしきさう
がちなどにもざれ(えイ)かぎ。めやすくかきすきひこり。
小松のれへしをめづしとこけるまゝに。衣
なるあることぐもかきまぎて

めげしや茶のれぐしままづひてゐる乃
かうすゞとへる蕎麦物いでゐるなどもあるべし
けるとへべし亂しあれバちなバ。ひさへしちなみ
うかすぢなど。うさまぎつあらとどりてゐるまひ
てげなしのへるちぢしげあり。かでさしめく
してゐるすゝ諸ほじくし。おざなし出て。さみすぐし
身づしのまてなしハうしこまりそうそ。めやすさ
ようハなるを凡人よりハことなりと切げまで。さるろさ
しげぎやうなりこのかうとのずゑうしさだしうか
脈ほじしうすしぶしなけるも。いとどなる海苑し
さそひてなるしくれバおうしきさしのれきもし

かれもやとつまいかれどこゝろにまとまりのぬれ
おぼしことなりうしとかたくに心をきておぼす
地 これこのおとゞにはましてめざ後しがふ人ぐ事
流 まゞあけぼのゝほどにつゝり語ぬかうしもあふ
まじき事ふかきぞかしと思ふになぐるもこゝ
ならずあられにしふ 紫ノ まちとりこまへるもこゝ なる後
けやかしとおぼすべかめる心のうちとりこれなて
詞 あやしきうこれをして ゆかくしうるけふ
いざこなきに さしもおどろかし語ちでと 紫ノ 此事
流ノ とりのふも 地 おしうこ也 紫ノ ことなるれいこへもなけ
れば 流ん ゆづりしくて そこ也をしめし日こゝくおほ

とのごもりおきたりかふ地ゑまゐじきやくのことは。
まぶうしてぞおもがくし給上達アミこたちなど
例の御りなくまいりぬへりれあそびありて川出抽
ろくなどはなし。そうしのどひぬへるが祇もとうら
じともてなしぬへる中にも。すうしなずらひなる
ごまえし給ひぬもれかれ。とりもなちてはいうそく
おほく抽志給ひなれど。れまへにてはけ紙されぬふ
もまろしかし。何のかずなるぬ志もべどもなどぶる。
六条院この院にまいりには心づかひことなりかるに。まして
ひかやかなる上達アなどはさふ心など抽しぬひて。
すぐろに心げさうし給ひしつゐのとしこるとも

ことなり。景の香さそふ夕風のどかに打吹たるなり。
おまへの梅やうくひもとさて。おれは誰(れ)どさなる
ま。物のしらべもおもしろく。このとれうち出たる
ひやうしいと景やかなり。おとゞもどさゞこゑ
おそへのへる。さきくさのすゑつゝ。いとなつかし
うめでたくさきも。なるごともさしいらへ。志給れひ
かりまもやされて。夜とも春ともますかぢめ。ことに
なんワれけり。うくのしろ馬車の春なども。もれ
へぞそし冥のふれかたぐハ。もちもの中の世界(せかい)なり。
まぐひしけざらん心ちもかくやと心やましげなり。
ましてひんぐしの(東陵之)境にもなれのへるれかたぐ(まつむうつせとなどく)を。

年月にそへて、つれぐの数のこまされど、世のう
き見えしぬ山路(ぢ)におもひなずらへて、いれなき
人の此心をがなるとかはこゝてまいりしとがめん。
その外の心もとなくさびしきことぢゝなれば、
をこちひのゝの人(うつせこ)は、そのまぎれなくつとめかれ
のようげのさうしのがくもん、心にいれ給もん
人(まつひ)は、まゝそのねがひにしたがひ、拙まめやかにもか
ぢしきをきてまも、こゝ心のねがひにしたがひ
まゝりもまねなり。さは(添)がしき日代迄してつゝり
のへり、ひとちの気のれかゝ(まつひ)は、人の程あれど、こゝろ(添ノ)
ぐりしく見して、人めれかぎりぢりも、いとよく

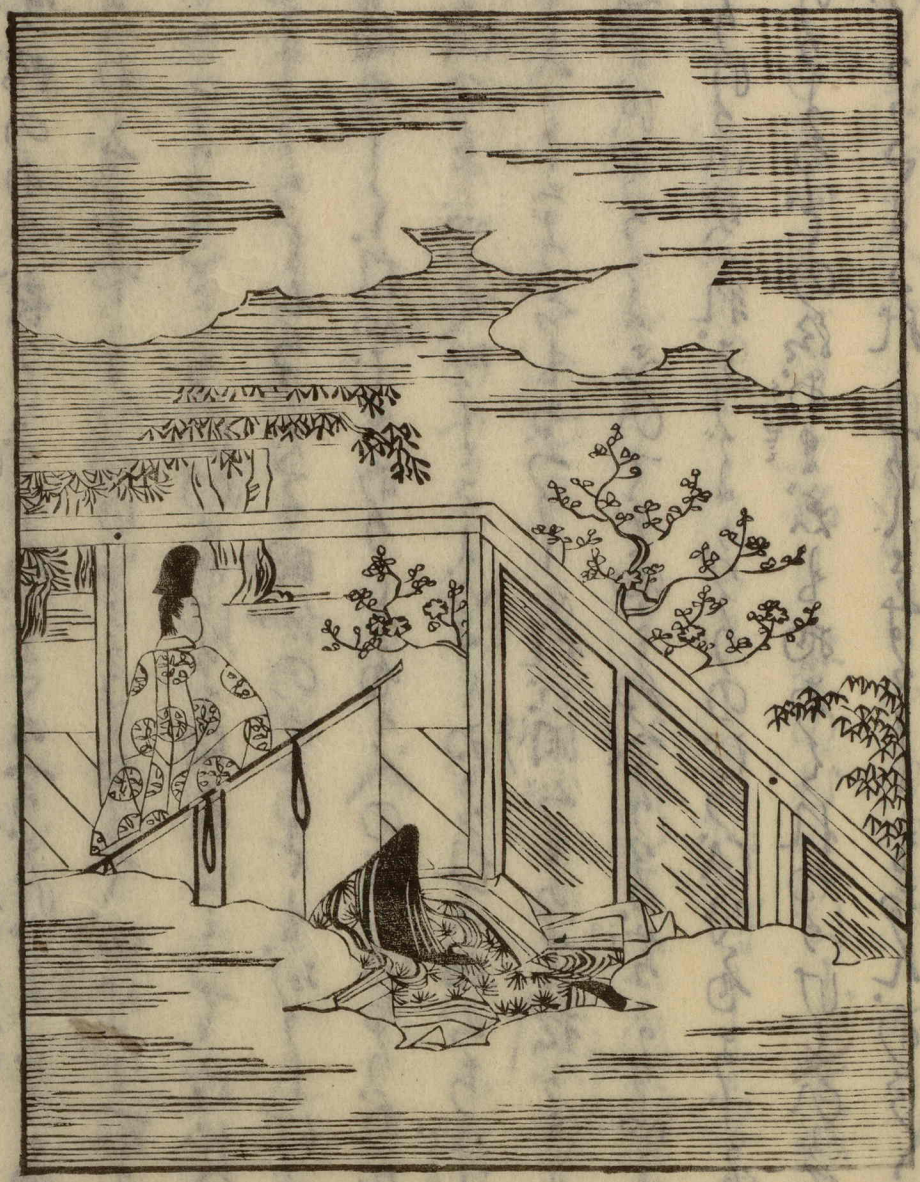
まてなしきこえ給いまし（末つむ）へさりとこえしれ
ワ（髪）ぐこもとしげまおとろへゆき。ましてうつさ（あらがきうつさ）ゑ
よどこえづしげちかれうてむらめるどをいと（涼心）
おしとおぼきぼ。まほまもむかひ給まぎ。やちぎ（末つむ衣裳ぞすえ）は
げまこそすき間じかりかれとこゆかも。きるしのへる
ひとがら此べし。ひかりまるくうろさかいねつ志。
さひぐしくちりうろひとうさね。さるをりまれく
うちきをさ給へ家いとさむける心ぐるしかされ乃
うちきなどはいかまゑるしうろりかあらん。れ
もれの色ぞかり。霞まもまぎろまじく茶やかるかま。
れ心まもあらずうちなげれまて。とさうまこさ

怯ひきつくろひ備(でそ)ゆふ中(地)ゝ夕(まつむ)はさしもおぼし
ことぶ今はかく衰まなげき此(ほノ)心のほどをおぼしき
抱まうちとけこれをきてゆへる此さ度あれ
ありがたうまもをしなべての人なしぞいと(ほノ)
おしくなしき人の此さ度とおぼさば衰まわれ
ごまこそそと此心とじめこまへなもありがたき
ぞかし此(まつむノ)こゑなどもいとさむげまうちまなくき
つくらひきそ給(ほノ)ひまづらひなて此(詞)ぞどもれ
ことうしろをきゆる人は侍るやかく心やすき
此すまねをこぶいとうちとけたるさ度まふくを
なへたるこそよけれうるべぞりつくろひたる此

よそひはおいなくなんと罪なくおんばこちくしく
さすがはつしひまて鰥酬（ごぶ）の阿闍梨（あごそ）の君のはおけ
かひしゆりとてさぬだもえぬひゆゑでなん。うちぎ
ぬをさへさられまし後さむく侍と罪しおふはいと
それおうきはをうとなりかり心うけくしといひ
ながらおまりうちとけるこうとおぼきど。そこまては
いとまめはさずくの人まておかす。かりぎぬをいと
よし山ぶしの身のしろ衣はゆづりまておんなん。
さて此いさりなさ日本の衣はなくへはもなどか
かさの給はざらん。さるべきおりくはうちつきれ
さらんことも。おぞろかしまへかし。もとよりおれ

おれしく。こゝ心のをとろりに。ましてうるぐの
肉ぶらりし。紀さをひよも。をのげうらあんとのなひ
て。むかひの僧のこゝろあけさをて。こゝぬあやなど
なしをぬふおれこゝ所もなけれど。すこ給りぬ所の
けるひはしげりなて。おまへの手ぶちぶりぞいと
面しろく。紅梅の咲出たる匂ひなど。こゝやまへも
なきなきこゝしなて

ふりさとの表の手紙にこゝぶ。こそよのつる
なしぬ事をこゝろれ。ひとりぶちなへど。[世]咲しり給
ぐぐるにかんりし



雲蝶のあま衣にも、さしのぞきぬべり。うけぢりたる夜
にはあらず。がぢやかにつぼ○ずこにしなして。仏汁に取え
をなりて、そこなひ川とめけるさ夜衣にこそて。雑仏の
がぢり。たるなくしたるしたる闕仂のぞなども。おしげに
な夜めしく。れ心ぢをありとこゆる人のけりひなり。あを
まびの車心ぢへおしさに。いたくぬかれて。袖ぐち汁
ぞ気ことなるしもなつしかれば。洞ぐこなて。松がうら
しまに。たるかにしひてぞやこぬべかりける。芳より心う
かりけるれ歎かれ。さすがにかげりのむつびは。ゆまじかり
けるよなどの給。おまぞも抱あられなるけるひにて。
うろうるにこれを写しさすらしもなん。あさくは

あらずしなへしられ行けりと字也。つねにありく。（添詞）
うきみて心まどひし給し。世のむくひなどを。私に
りしてまり字ゆりこそくるしかれ。おぼししるや
りくいとするをましもあらぬものとも。しひおりを
おふこともあらじやりとなんしふとのおふ。（うつせみ）枝あさ
ましかりし（紀写がんかけさうしてるべ）世のつりことを。さくさきなへるなめり
と。たづしく。（詞）かりありさ夜を。ゆらんじまそて
らるくよりほかれむくひ。いげこまう待らんとて。
ことまうちなさぬ。（添ん）いましへよりも抱かりくまげ
りしげさまさりて。かくもてまるれさうことくおぼす
しも。そもなちがくくおぼさうれど。たるなさことに

のさまひかくべくもあらず。たかさの勢今の物語を
志まて。かぐらりのいふかひざまあれかしと。あるさな
こやつまふ。やうまてもはかげまかられたる人ご
おほかり。これさしのぞきつたしまて。おぼしかるさ
日かず。しもかりあれど。心の中はなてこしぞ
なん。こゝかぐらりあるこちの。別のこそうしろめた
かれ。食ぞ志らぬなど。なつしくの語。いづれをも
程こまつけて。おそれとおぼしたり。我はとおぼし
あがりぬべきは男の目どなれど。さしもことく
志くもてなし語ぞ。所まつけ人の目どまつけし。
あまもくなつしくおりしませば。こゝかぐらりの

れうろまうらまてなん。おほくの人ぐ年月をへ
けることしハおとてぐうりあり。うち(門裏)より出雀院に
まいりて。つぎに山(六条)院にまいる。月の程とをくて。我の
明ぐるに如ようなり。月のくもりなくすみまさりて。
うす雪すこしふれる庭のえなるぬに。夜上人なども。
ものゝ上手(ざ)おほかるころほひにて。ふえの音もいと
おもしろくふきたてく。このおまへ(係ノ)ハことにころづ
かひしたり。れかるゝぐ拘見にいるに給べくかの
てれ(係)きうそこどもありそれぞ。左(さ)右(う)のたい。わた
夏などに。れつぎ。しけしおもしてよしのたいの
姫(ひ)君ハ。寝殿(しんでん)の南のれかるにいたりまて。こなたの

ひめぎみは、れいめんをかり。上もひとゝころ
おはしまをば、ミ木帳ぞうりへぞしゝをうえたまふ。
半蔭院、さきいの家のれうゝなどめぐりけるほどに。
夜もやうくあけゆけば、こげむまやまで、とそ
がきぬべき紙、例あることゝよりほかる。さ海ことに
ことくさへて、いとじくもてもやさをかふ。新すさ
まじき曉月夜に、雪はやうくふりつむ。松かぎ
木ごうく吹おろし、地すさ海じくもをぬべき程に。
あを色のるへぞめるに、しらがさねの女あひ、なるの
かぎりかはこゆる。かぎしのうるはうりほひもなき地
なれど、所からにやおもしろく心ゆきいのちのぶる

ほどなり。夜の中(ヲ)ゆの君。内の大(は)夜の公遊。そこらに
もぐれてめやすく夜やなり。ほのぐと明りに。
ゆきやゝちりて。そぐろさむきに。ふけがはうるひて。
かよれるすぐるなつしき声ごの絵(ね)うしもうき
とめがるゝかんこそくちおしけれ。ゆかるゝぐ。いづ
れもいづれも。おとしぬ袖ぐちどもこぼれいでたる
こちたさ。もれゝいろあひなども。あけぼのこそしに
黒のよしきたち出まける。霜のうちかとミつるさう。
あやしく心ゆくこもれまぞありける。さらはうう
ぐしのよぞなれたるさ海。ことぶきのこぐりがりし
き。をこあきたることも。ことくしくとりなし

ころ中くなまぢりのおもしろうべきひやう
しも罪ぬ物を例のいさぐきいたりてまうでぬ
夷あけたてぬれば此ぐぐ屋をいたる給ぬ
おとゞの君すうしおほとのごもりて日ごろくたさ
なんり中ねのこゝ君ハ辨のおねり おさくをとら
ざめりハおやもくいふそくども おひ出り此ほひに
こそあれいうしへのひとハまことよりしこゝさか
こやもこゞれこうこともおほかりけん なさけぶろ
すぢハこのごろの人にえしもまさしぶりかんし
中ねなどをばすくしき おほやけべにもなし
てんとなん もひ出てし 月げかしのあぞれぞ

こゝろかなくなしさ候。もてもなれよとゝひしかど
なほ志るまは候のすさこゝろすぢの心をこそとゞ
むべかめれ。もて志げめ。すくよりなりうもべげりハ
うつさりめりなど。いとうけくしとおぼしたり。ぞむ
すらくれくちずさひまのなひて。人ごのなるまま
けどひなへるついでまいでゝ物のひころこそし
がれ。けるくしの投（とうえん）夢あるべしとのなひてれことぞ
うりしきかくろどもして。ひめをかをこ海へる。
これ引出て。そしのごひて。ゆるべるをとしのへさ
せなひなどす。れ（地）かるぐ（常）こゝろづかひいくしつ。
心げさうせけくしなかんし

69038
6AP78